

見よ、新しいことをわたしは行う。
今や、それは芽生えている。
あなたたちはそれを悟らないのか。
わたしは荒れ野に道を敷き
砂漠に大河を流れさせる。
(イザヤ43:19)

私を魅了してやまない人がいる。それはペンシャール会の中村哲さんである。昨年12月8日に彼はテロに巻き込まれて銃弾に倒れた。遺された仲間達の悲痛な叫びが聞こえてきた。大の大人達が声を上げて泣いていた。彼の生き方、在り方が彼らをそうさせているのだと思った。憎しみによる報復を彼自身が最も望まないと誰もが知っていた。だから、復讐よりも彼の意志に従う道を彼らは選んだ。その姿がイエスを失った弟子達の姿に重なった。そしてようやく理解した。想像を越える大きな愛に出会った時、私達は自分の正義やこだわりをいとも簡単に捨てられるのだと。それは、その愛に勝るものは何もなく、その愛に報いる生き方をしたい、と心の底から望むようになるからである。

彼はアフガニスタンで医療活動に従事していた。医師として何千、何万もの人を救った。しかし、治療しても治療しても悪化していく子ども達を診て、こう言った。「百人の医者より一本の水路があれば現状は変わる」彼は白衣を脱いだ。そして乾いた大地に用水路を引くために彼は動き出した。自分のスキルにこだわり、そこにすがって変われない人間が世の常だが、彼は違った。今、目の前にいる人間が欲しているもの、そこに焦点を合わせた。「きれいな水」、それが全ての根源だと悟った彼は、どこまでも隣人のために下っていった。

干ばつ時でも干上がらない川が一本あった。そこから水路を引く計画を立てた。その長さ25.5km。素人には想像を絶する距離だ。資金もノウハウもない。彼は独学で土木と農業を学んだ。「議論している余地はない。実行あるのみ」と言って現地の人々と共に工事を開始した。

また「アフガンの問題は政治の問題ではない。水とパンの問題だ。食べていければ、家族を養えれば、タリバンや反タリバン、^{ぐんぼつ}軍閥の^{ようへい}傭兵になる者はいない。」と彼は言った。戦闘で負傷した兵士が彼の元にやって来る。彼は周囲の反対を押し切って治療を施す。「回復したら再び彼らは銃を持つ。戦闘が長引くだけだ」という批判の声がある中で。しかしやがて、タリバンの戦闘員が、アメリカの傭兵が、銃をつるはしに変えて彼の元に戻って来た。「自分たちの力で国を立ち直らせたい」と。

着工から5年、^{せき}堰を外す時が来た。彼の歩く速度に合わせて水路に川の水がゆっくりと流れていった。彼の背中に水がつき従うように見えた。乾いた大地に水が込み込んでいった。水辺に生き物が群がった。そこに緑が育った。灰色だった世界が色付いて行く光景は奇跡を見ているようだった。彼らは手に農具を持って大地を耕し始めた。そして豊かな収穫を得た。人々に笑顔が戻った。家族がそこにいた。私は被造物の原点を見た気がした。市場ができて賑わい、経済が潤っていった。(イザヤ:35:1 荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ。砂漠よ、喜び、花を咲かせよ。野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ、大いに喜んで、声をあげよ。)

現地の人々が次に望んだもの、それはモスクだった。願いは間もなく叶えられた。モスクは完成し、老若男女がそこに集い、心をつにして唯一の神を拝した。それをご覧になった神がお喜びになっているのを、私は全身で感じた。その時、初めて私は悟った。宗教を信じる目的を。それは人々を隔てていた壁に穴を開けて、双方を繋ぐことだと。そして相手の宗教を最大限に尊ぶことだと。キリスト者である中村哲さんの生涯は、敵対していた戦闘員たち、分断されていたアフガニスタンの人々を繋ぎ、彼らの心の拠り所であるモスクを完成させた。着工から6年、完成は間近だった。そんな時に彼は銃弾に倒れた。(エフェソ2:14「二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊しました。」)

彼に出会って以来、試練の捉え方が変わった。試練や困難というものは神を呪ったり、我が身の不幸を嘆いたりするためのものではなく、互いに争い、傷付け合ったりするためのものでもない、と。試練とはまさしくこの私が答えを出さなければならない、神からの問いなのだ。（今、世界を混乱させている新型のウイルス性の肺炎も人類の一人として、冷静に対峙しなければならない課題であると思っている。）神の試練は檸檬のように苦くて酸っぱい。そのまま頂戴することは到底出来ない。私達の作業は、その苦くて酸っぱい檸檬を絞り、そこにソーダーを入れたり、蜂蜜を足したりして「美味しいレモネード」にすることなのであろう。私達は時折、生きる意味がわからなくなり、神にその意味を問うが、神の方が私達に生きる意味を問うているのである。「お前なら、どうするのか。」と。我々は答えを出す側なのだ。生き方、在り方に正解がないと言われているこの時代に私達が出す答えは、ただ一つ、神が自分に示されたミッションを聴き取り、受け取って、行うことである。

受難や苦しみは新約聖書では「杯」にたとえられる。「この杯を私から取り除けて欲しい」と主イエスでさえ受難（十字架）を拒む気持ちがあった。私達なら、尚更である。でも、願わくは、神から出された杯に手を伸ばして丁寧に受け取りたい。そして、中を覗き込んで、注がれている酒（試練）を、時間をかけて味わい、最後の一滴まで飲み干したい（私は下戸であるが）。その後、空の杯を神にお返しするのだ。「最高にまずかったです。でも最高の恵でした」という言葉を添えて。

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ
砂漠よ、喜び、花を咲かせよ
野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ
大いに喜んで、声をあげよ。

砂漠はレバノンの栄光と与えられ
カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

弱った手に力を込め、よろめく膝を強くせよ。
心おののく人々に言え。
「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。
敵を打ち、悪に報いる神が来られる。
神は来て、あなたたちを救われる。」
そのとき、見えない人の目が開き
聞こえない人の耳が開く。
そのとき歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。
口の利けなかった人が喜び歌う。

荒れ野に水が湧きいで
荒れ地に川が流れる。
熱した砂地は湖となり
乾いた地は水の湧くところとなる。
山犬がうづくまるところは
葦やパピルスの茂るところとなる。

（イザヤ35：2～7）